

ウィニー —— ある子供の物語 ——

原作 E.D.E.N. サウスワース

訳 藤野功一

快活で忙しそうな足音をたてて
こまごまとした家事をこなしているのは、
巣の中でも一番の働き者の、あの陽気なミツバチ——ミットフォード¹

昔、アメリカ国会議事堂の北側に広がる緑の平原のなかに、なかば果樹園に隠れるようにして、小さな白い家が立っていた。その家の前には小さな花畑があり、横には小さな野菜畑があり、そして家の後ろには薪をしまふ納屋と小さな鶏小屋のある養鶏場があった。この小さな家には部屋が4つしかなかった。一階には小さな居間と台所があり、二階には2つ寝室があった。南側の寝室はこの家の主人と彼の妻が寝るところで、北側の寝室は、彼らの娘である12歳の小さな女の子の部屋になっていた。

このつつましい家の主人と女主人の名前はシンプソンといい、彼らの小さな娘の名前はリジーと言った。

シンプソン氏はもともと、たいへん正直で、陽気で、心の優しい男であったが、監獄付きの巡査という仕事に従事するようになって、そのやさしい心をすさませてしまっていた。最初にシンプソン氏がこの仕事についたとき、彼は巡査として彼の目の前でいつも目にする罪深くみじめな人々に大いに同情を感じた。けれども、彼の同情は彼のもともとの性質から来たものであって、宗教心から出ていたものではなかったため、同情は簡単に無感動な習慣に取って代わってしまった。そして10年間ものあいだ、犯罪と苦痛に慣れ親しんだあとには、シンプソン氏はすっかり変わり果てた人物になってしまった。このことは、読者の方々もこれから彼の人生の二つの行動を比べ合わせてみればわかること

だろう。

シンプソン夫人は、結婚したときは健康で、快活な、目鼻立ちの整った少女だったが、濃いお茶とコーヒーを飲んで焼きたてのパンを食べ、身体を締め付ける服を着て、閉め切った部屋の悪い空気を吸っていたので、自分の健康をすっかり壊してしまい、いまでは、昼間のあいだはずっと消化不良をわずらって、ほとんどすっかり自分の居間に閉じこもって肘掛け椅子に座りっぱなしであった。

しかし、リジー・シンプソンは元気で、器量良しの、陽気な小さな娘であり、黒い目と黒い巻き毛に、真っ赤なほっぺた、真っ白な歯、そしていつも唇に笑みをたたえている娘であった。読者の方々には彼女の元気の秘密をお教えしよう。リジーはたまたまある新聞で、濃いコーヒーや紅茶を飲み、焼きたてのパンを食べ、悪い空気を吸い、怠惰、そして清潔さを怠ることは、健康にも、快活さにも、そして身体のおもしろさにも悪影響を及ぼすこと、そして結果的には、もちろん、分別にも悪影響が出るという記事を読んだのである。そしてリジーは、他の大多数の少女とは違って、彼女が読んだことを自分の生活に役立てた——リジーはとても清潔で、とても節度があり、とても、とても勤勉な少女になった。そして、もちろん彼女は、いつも健康で、器量良しで、ほがらかな少女になったのだった。

リジーは彼女の父親の家政婦であり、彼女の母親の看護婦であった。リジーは12歳で家の掃除をし、食事を作り、鶏にえさをやり、そして牛の乳を絞った。彼女の父親も彼女を大変よく手伝ってくれた。彼は薪を割り、水を運び、そして庭の手入れをした。そのためリジーは仕事にうんざりするようにはなかった——仕事は彼女の遊びであった。

だが、どんな小さな女の子にも欲しいものがある、あるいは、欲しいものがあると思っているものだ。リジーはペットが欲しかった。心の底から、彼女はペットを欲しがっていた。

ある暑い、夏の真っ盛りの日に、リジーは早々とお茶の支度をしていた。彼女は前庭のところの木の下にテーブルを置いて、熟れたラズベリーを摘んで自分たちの牛から作ったクリームで食べることにした。それから彼女は彼女の母

親の揺り椅子を外に出してテーブルのところに置くと、彼女の母親を説得して、外に出て、涼しい木陰の空気が心地よいところに座らせた。母娘がそこに座って、父親の帰りを待っていると、そこに父親が小さな枝組み細工の門を開いて、帰ってきた。彼は座るとお茶を飲んだ。彼はとても真剣な顔つきをしていた。シンプソン夫人が彼に一体何事が起こったのか、何か困ったことでもあるのかと尋ねると、父親はこう答えた。「いや、何でもなし、何でもなし」そしてその額から陰気そうな表情を追い払った。父親はその頃はまだ親切な心を持った男で、悪い知らせを聞かせて病弱な妻を困らせるようなことは、できればしたくなかったのである。やがて、彼はリジーの方を向き、機嫌良く言った——

「お嬢さん、お前のためにペットをもらってきたよ」

「まあ、ありがとう、お父さん！でもどんなペット？」

「なんだかあててみてごらん」

「三毛猫かしら」

「いや、そうじゃない。なにかわかるかな」

「カナリアかしら——鳥かなにかね？」

「いやちがう。もっとべつのだ」

「小さな子犬かしら」

「いいや、もう一回」

「全く分からないわ。お猿じゃないわよね」

「いや、人間の赤ちゃんさ！」

「赤ん坊ですって！まあ！お父さん、でもわたし、ずいぶん前にお人形さんごっこをするのをあきらめて、人形もすっかりみんなあげてしまったわ！」そう言うとうりジーは、悔しさと失望の入り交じった表情をした。

「いや、私は赤ん坊のお人形の話をしているんじゃないんだよ。私は本物の赤ん坊をもらったんだ——生きている赤ん坊さ——かわいそうな、生まれて4週間の孤児の赤ちゃんをお前にあげようというのさ。」

「まあ、お父さん！まあ、お父さん！」と、言い表せないほどの驚きと喜びを感じながら、リジーは叫んだ。「もし本当なら本当とちゃんと言ってちょうだい

な、ほんとに！生きている赤ん坊を、私にくれるなんて！」

「ああ、本当なんだよ、リジー。それはほかでもない、正真正銘、本当のことなんだよ。私は監獄で、生きている小さな孤児の赤ちゃんを見つけて、それをお前に、お前の赤ちゃんとしてあげようと思うのだ。その赤ちゃんはお前の自由にしてよいのだよ。」

「まあ！私、きっとその赤ちゃんを可愛がるわ。ああ、子猫や子犬よりもずっと素晴らしいプレゼントよ。ああ、赤ちゃんて、^{ひょうきん}剽軽なんでしょう？赤ちゃんて、嬉しいものなんでしょう？でも、いやだわ、きっとこれは夢ね？しばらくするとお日様が私の顔に当たって、私の目が覚めて、私は寝坊をして、これはみんな夢だったてことになるんだわ」そういうとリジーは、これが夢か現実かわからないといった顔つきをした。

「もし万が一眠っていたとしても、これで目が覚めるんじゃないかな？」そう彼女の父親は尋ねると、リジーの腕をぎゅっつつねった。

リジーは悲鳴を上げると、笑った。——そして、目は覚めているわとはっきり言った。

「なんてことかしらね、すっかり話を聞いてみたけれど、お前さんが冗談を言っているのかと思ったよ。さあ、どういうことなのかすっかり話しておくれ」と、シンプソン夫人が言った。

「もちろんだよ、お母さん、もちろん」とシンプソン氏は答えた。

そしてシンプソン氏は話し始めた。そしてほんのしばらく前に、彼は職務のために、ある奴隷女を逮捕して牢屋に入れなくてはならなかったこと、そして牢屋にいる間に、その奴隷女は子供を産み、そして死んでしまったこと、——そしてとうとう最後に、上司がその子供を自分に与えたことを話して聞かせた。そして善良な巡査は、この話をしている間に2度3度と涙を抑えるのだった。リジーも、その話を聞いている間に何度か涙を流しそうになった。しかし、話の最後に来ると、彼女の考えは赤ちゃんのことに戻り、生まれたばかりの赤ん坊を自分のペットに出来るのだという考えに有頂天になって、かわいそうな母親のことはほとんど考えなくなった。

「それで、本当に、お父さん、お父さんの職場の人たちはお父さんに赤ちゃん

をくれたの？」

「そうさ、リジー」

「そして、お父さん、ほんとにほんとに、その子を私にしてくれるの？」

「本当さ、かわいいリジー」

「それじゃ本当にそれは私の赤ちゃんになるのね、そして私がずっとその子を育てて、お乳をあげて、服を着せて、その子の小さなお母さんになっていいのね？それで、いったいつ赤ちゃんをつれてきてくれるの？その子、男の子？女の子？」

「そう、全部お前の言う通りだよ、そしてその子は女の子なんだ。それで私は、夕食を食べ終わったら早速その赤ちゃんを連れてこようと思う——つまりその、もしお前のお母さんが何も反対しなければなんだが」

「私はなにも反対しやしませんよ——つまり、もしあなたがリジーを信用して、その子の世話をすっかり任せるんなら、だけどね。」

「もちろん世話するわ」

「それであらゆる厄介ごとを引き受ける気持ちがあるって言うなら」——

「ああ、もちろんよ、お母さん、それこそ私が望んでいることだわ」

「仕方がないわね——それなら反対しないわ——でもお母さんはどんな厄介ごとでも引き受けないと言いましたからね。——私たちと一緒にの部屋でその子が寝て、夜中ひっきりなしに起こされるなんてなんてまっぴらですからね。」とシンプソン夫人は言った。

夫人の返事は、それでも、彼女の夫にはずいぶんと喜ばしいものだった。それというのも、彼は彼女から、自分の計画についてもっと真剣に反対されると思っていたからである。

夕食が終わると、シンプソン氏は出かけて行って、赤ん坊を連れて帰ってきた。赤ん坊は健康そうで、かわいい子供だった——元気がよく、黒い髪の毛と黒い目をした混血の子供だ。シンプソン夫人はそのかわいそうな赤ん坊を、気難しい、うんざりしたような哀れみの目で見つめていた。リジーはその赤ん坊をすぐに自分の部屋に連れて行った。そして自分の部屋のベッドに寝かせると、出て行って、牛の乳を搾り、まだあたたかい絞り立ての牛乳をその子に与えた。

次の日、リジーは自分の衣服をさんざん引っ掻き回して、自分の赤ちゃんのために裁断できる古着を探した。リジーは成長の早い子で、自分のお下がりを着古してしまう小さな妹もいなかったの、彼女は自分には小さくなったドレスやらスカートやらをたくさんしまい込んでいた。こういった服は、彼女のお母さんの許可をもらって、赤ん坊の服にするために裁断した。

数ヶ月が経つと、小さな赤ん坊はすくすくと育って、その年の終わりには歩いたり、舌足らずながら少し言葉もしゃべるようになった。

半ば愛情から、そして半ばふざけて、リジーはその子に自分を「お母さん」と呼ぶように教えた。そしてその赤ん坊はそのあとずっと彼女をそう呼んだ。

その女の子の赤ん坊はとてもかわいらしくて愛嬌があったので、リジーはその小さな女の子をウィニーと呼んだ。そしてそのあとずっとその子の名前はウィニーで通ることになった。

年月が過ぎて、リジーの父親は頭角を現し、警官として出世したあと、こんどは裁判官となり、十分な給料をもらったので、広い屋敷を建て、自分の生活を快適に、それどころか贅沢にして、そしてなによりも家の世話をする下女を雇い、さらには庭の世話をし、使い走りなどをする下男を雇った。これでリジーには自分のきれいな心をますます磨き、彼女がウィニーと呼ぶ小さな娘を教育する余裕ができた。シンプソン夫人の健康はいっこうに良くなる様子はなかったが、だからといって悪くなりそうもなかった。そうして年月が経ってとうとうウィニーは5歳になり、リジーは17歳になった。すると、ロバート・オリソンという順風満帆な商売をしている若者がリジーを見初めて、足しげく通うようになった。この若者をよく知るようになると、リジーは、彼が感じもよく頭が良いと分かって、彼を愛するようになった。そうしてどちらの両親にも二人の仲が認められたので、ロバート・オリソンとリジー・シンプソンは結婚した。さて、この話の前半はここでひとまず終わりにするとしよう。

ロバート・オリソンとリジーが住むことにしたのは、いままで目にしたなか

でも一番かわいらしい小さな家であった。ロバートはリジーの父親と母親の家の近くに土地を買い、平屋建ての家を建てた。壁は白く塗られ、窓には緑色のよろい戸をつけ、正面には屋根付きのベランダがあり、ベランダの柱にはスイカズラとジャスミンが巻き付いているのだった。家の目の前には花畑が広がっていた。裏には小さな裏庭に向けて口を開けた屋根つきの納屋があり、その奥にはいくつかのまだ若い果物の木が植わった野菜畑がある。家の中にある家具はどれも飾り気のない質素なものではあったが、真新しい趣味のよいものであった。どれもこれもが真新しく、できたばかりだった。小さな家の正面のベランダには、かわいらしい赤と緑の柄のイギリス風のカーペットがあり、座るところが藁で編まれた趣味の良い椅子、たいへん高級感のあるワニスでつや出しされたチェリー材のテーブルとカウンターチェアが置いてあった。そして家の正面の二つの窓には真っ白い木綿織のカーテンがかかっている、それを青いリボンでまとめていた。そしてその間に姿見の鏡がかかっていた。リジーの寝室の家具は全部白で統一されていた。寝台も、化粧ダンスも、洋服ダンスも、そして椅子も、すべてどれも松材を白く塗った家具で、ワニスでつや出しをされていたので、それらはまるで真っ白い陶器のようだった。窓は日よけ用に薄い格子縞の綿のカーテンがかかっている、藁で編んだマットレスが床にひいてあった。

ウィニーはリジーに引き取られて、リジーの部屋につながっている小さな部屋を与えられた。

夫のロバートと一緒に、この家に両親をお茶に招いた時、どれだけリジーが自慢に思い、そして幸せだったか、そしてまた、リジーがささやかな夕食を準備するのにどれだけ手間をかけたか、そしてどれだけ一生懸命に、応接間の奥にある小さなダイニングテーブルに彼女がその献立を並べたか、そうして、どんなに彼女の白いオランダ陶器²の食器が上品に見えたか、そして彼女のそろえた真新しいナイフやフォークやスプーンがきらきら輝いて見えたか、そうしてどれほどしみ一つなく、きれいに、上品に並べられてそれらすべてがテーブルに配置されたか、そうして、しまいに夫のロバート・オリソンが、なんと両親へのもてなしにとパイナップルを買ってきたことなど、それらすべてのこと

を、ここで読者の方々に伝えるだけの十分な余裕がないのはまことに残念だ。本当に、リジーの言うこの、生涯で最も幸福な一日に数えられる日について、もっとゆっくりと説明したいのだが、しかし物語の先を急ごう。

それから何年もしたあと、リジーは自分の身請けした子供がとても自分の手助けをしてくれることに気がついた。リジーは小さなウィニーに注意深く読み書きと計算の仕方を教えた。そして、針仕事、編み物、洗濯、料理、そして家の掃除の仕方を教えた。それからウィニーはとうとう、ウィニーを教え育てたリジーがかつてそうであったような、小さな儉約家の家政婦となったのである。

こうして日々は幸せに過ぎて行き、とうとう小さなウィニーは12歳の賢い少女に成長した。この頃になると、ウィニーはもう立派に小さなやりくり上手になっていたので、リジーが家を留守にするときには、ウィニーが家のことをすべてするまでになっていた。ウィニーはリジーを「お母さん」と呼び、ロバートを「お父さん」と呼び、そしてリジーとロバートはどちらもウィニーを娘として可愛がった。全くのところ、ウィニーは、彼らが彼女を愛している点から言っても、そしてまた彼女を信頼している点から言っても、まるで彼らの家の実の長女であるかのようにだった。それというのも、リジーとロバートの間には他にも子ども達が生まれていたからだ——6歳の男の子で、名前はボブ。それから5歳の女の子で、名前はリジーである——そしてさらに3歳の男の子のウィリーと、女の子の赤ん坊のミリーがいた。そしてウィニーはその子たちの実のお姉さんのようだった——彼女はその子たちをみんな愛していたし、また、彼女の世話を実に良くしていた。リジーは、あるいはもうオリソン夫人と読んでも良いと思うが、何の心配もせずに子どもたちの世話をウィニーに任せて出かけられるのだった。

こうして何年もが過ぎ、オリソン夫妻は心身ともに充実し、金銭的にも豊かになった。彼らは世間的な付き合いにおいても、家の中の関係でも、そして商売においても、すべてうまくいっていた。しかし、彼らの生活のこの上なく幸せなときに、リジーの生活でも最初の試練が彼女に襲いかかった。

彼女の病弱な母親がとうとう死んだのである。

リジーが長い間母親の死から立ち直れず、心の安らぎもなくなったのをみて、

ウィニーもその悲しみを分かち合おうとした。ロバート・オリソンの深い思いやりと、ウィニーや子どもたちの愛情をすっかり注ぎ込んで、やっとリジーはこの天から与えられた運命を受け入れることができたのだった。

一年かけてようやく、リジーは以前のような快活さを取り戻した。ところが、何ということだろう！ またもひき続いての不幸がかわいそうなりリジーを襲った——その苦悩はあまりにひどかったので、それを耐え忍んだリジーも、時にはこの太陽のさんさんと降り注ぐ大地や豊かな大地が、まるで「恐怖に満ちてすさんだ荒地」のようだと大声で叫びたい気持ちになるくらいであった。

そもそもの始まりは、彼女の父親が再婚したことであった——相手は若くて浅はかで、見栄っ張りでわがままな娘で、父親に対する愛情などはこれっぽちもなかったが、それまでの彼女はしがないお針子だったので、おそらく自分のこざれいな家を持ってそれを切り盛りする方が、他の人のために針仕事をするより楽しいと思って父親の求婚を受け入れたのだろう。

こうしてリジーの苦難が始まったのだが、リジーにとってそれを辛抱するのは並大抵のことではなかった。最初の苦難は、この若いシンプソン夫人が自分の継娘と彼女の夫と子どもたちを毛嫌いすることからはじまった。それというのも、リジーが自分の夫の財産の大部分を相続する見込みだからだった。次に、このシンプソン夫人は夫のシンプソン氏とリジーの家族を仲違いさせようとした。これらだけでも十分不幸なことだったが、最大の不幸はまだ訪れていなかったのである。

ある日、シンプソン夫人は偶然、ウィニーが格別に可愛がられているのを見とがめて、「あの黒んぼ」がずっと甘やかされてきたことについて不平を述べた。するとシンプソン氏は、自分の娘をかばおうとして、どうしてリジーが常ならぬ愛情をあの子に与えているのかの理由を説明した——つまり、どんな風にしてウィニーが小さい頃にリジーに引き取られたのか、などなどについて説明したのである。

「それじゃあ、あの子供はあなたにもらわれたんですね」とシンプソン夫人は言った。

「そういうことになるね」

「あの子の所有者があの子をあなたに譲ったんですね」

「そうだね。私が一切の処理をしたんだ。小さな赤ん坊を自分の家族で引き取って育てることには、格別何の面倒もなかったし、金もかからないし、何の不都合もないからね。彼女が大きくなって働けるようになったら、彼女は私たちの家から出て行くようにすれば良いのさ。」

「それで貴方はその赤ん坊をリジーにあげたんですね？」

「そうだ。そしてリジーが自分の娘のようにあの子を育ててね。そういうわけで、おまえが見たようにリジーはウィニーを可愛がっているし、お前も言うように、甘やかしているってわけさ。」

「ええ、ええ、わかりましたわ。——ところで、あなたはリジーにウィニーの譲渡証明書をお渡しになったの？」

「いや、——いや、そんなものは必要ないんだよ、そうだろう。私はウィニーをリジーから取り上げようだなんて思っていないし、——そんなこと考えたこともなかったよ。」

「ええ、ええ、そうでしょうね——それじゃあ、結局のところ、ウィニーは本当は私たちのものだということになりますわね？」

「まあ——そうだ——そういうことになるかな」

このような会話の後、シンプソン夫人はどうやってシンプソン氏を説得してウィニーをリジーのもとから引き離して、自分のところに連れ戻すことができるかどうかばかり考えるようになった。シンプソン夫人がそうしたいと思うにはいくつかの理由があった。一つ目の理由は、彼女はリジーが嫌いなので、ウィニーを引き離してリジーを困らせてやりたいと思っていたためである。二つ目の理由は、シンプソン夫人が家事をするにあたって、ウィニーのように几帳面で、よく働いて有能な女の子が欲しいと思っていたからだ。さて、手短かに言うと、彼女は「うちの亭主」と議論をし、うるさく責め立て、丸め込み、その粘り強い意思、その詭弁、その甘言を弄して、とうとうシンプソン氏を説得して、さっそく書類を書いて、丁寧にそして愛想良く、ウィニーを返してくれるよう要求し、申し訳ないのだがうちの妻がウィニーの助けを必要としているのだ、という申し渡しをさせたのだった。

シンプソン夫人はその書類の最後の部分に、彼女をシンプソン氏の「妻」とよばせる余計な一言を付け加えることで、リジーに嫌な思いをよりいっそう味あわせようとしたのである。

読者のご想像通り、リジーはこの要求に困り果てた。リジーには、シンプソン氏の再婚した妻がこの手紙を書かせたことが分かっていたのである。意地悪なシンプソン夫人のもとでは、ウィニーがその道徳心に悪影響を受けてしまうことはわかりきっていた。リジーは彼女の父親の体の調子が優れず、いつ死ぬとも限らないために、父親の再婚相手が強く出て、遺言状にウィニーを自分の妻のものにさせるようにしたであろうことも分かっていた。なんということだろう！そんなことになってはウィニーにはひどく残酷な運命しか待っていないであろうことをリジーは感じ取っていた。リジーには、シンプソン夫人がウィニーを、残酷にとまではいかないまでも、ひどく気ままにこき使うであろうことが分かっていた。ついには、リジーはウィニーを手放すことはリジー自身にばかりでなく、彼女の夫や自分の子どもたちにもひどい痛みを与えるだろうし、ウィニーの心もほとんどずたずたに引き裂いてしまうだろうと思うようになった。そこでリジーはこの要求にすぐに返事をしなかった。彼女はその晩、自分の夫が家に帰ってくるのを待った。そして夕食後のお茶が済み、ウィニーも子どもたちを寝かしつけてから自分の部屋に引き下がった後で、はじめてリジーは夫に何が起こったかを話した。彼はその知らせにひどく驚き、思い悩んだ。彼らは相談し、そしてとうとう最後に、あらゆることを考えに入れると、大変つらいことだが、父親の要求に従うことを拒否することが自分たちの義務だということになった。このことをきちんと丁寧に告げるために、ロバートは翌日は仕事を休み、ロバートとリジーが二人そろって父親のもとを訪れ、ウィニーを自分たちのもとに置きたいという理由をはっきり述べることにした。

シンプソン氏はひどく不機嫌になって、彼の要求は受け入れられるべきだと強く要求した。

ロバートはそれに対して、丁寧に、しかし断固として、ウィニーを引き渡すことはできないと答えたのである。

このようにきっぱりと断られて、老いた父親はひどく怒り、どうして自分の

願いをはっきりと断れるのかといぶかしみ、このことの報いを受けるぞとロバートを脅した。

ロバートとリジーは家に帰ると、このことをひどく悲しんだが、ウィニーは決してあきらめないということを心から決心した。

リジーの老父の言ったことは嘘ではなかった。なぜなら彼は再婚相手にひどく影響を受けていたからだ。老父はその日に出かけて行って、ウィニーの差し押さえの令状をもらおうと、それを保安官の手に渡したのである。

その間にも、ロバートとリジーは父親がその脅しを考え直して自分たちとリジーのことを許してくれて、そのままにしておいてくれないかと思っていた。だが、悲しいことに、彼らの希望は全く空^{むな}しいものとなったのである。

翌朝、ロバートは仕事に行き、リジーは家で針仕事をしていた。一方ウィニーは子どもたちの世話をしていた。リジーはチョッキを作っていて、ウィニーはその注意^{じゆうたん}を絨毯の上で遊んでいる赤ちゃんに向けながら、その手でちょっとした刺繍の仕事をしていた。天気はとてもよく、ドアは開け放たれ、そして彼らの目の前にはきれいな花畑が広がっていた。だが急に、そのドアを黒い影が覆うと、老シンプソン氏が保安官をひき連れて入ってきた。

「おはよう、オリソン夫人」と、保安官は丁寧と言った。

老シンプソン氏は何も言わなかったが、ウィニーを指差すと、こう言った——
「あれがその女の子です、保安官様」

するとその役人は、その手をウィニーの肩に置きながら、リジーの方を向いてこう言った。

「では、オリソン夫人、エリシャ・シンプソン氏の訴えにより、この娘をシンプソン夫人の所有物として拘束いたしますぞ」

そうして彼はウィニーを拘束した。リジーは死ぬほど真っ青になった。ウィニーの目は驚きで大きく見開かれていた。それというのも、ウィニーは何が起こったのか、ほんの少しも理解できなかったからである。子どもたちは本能的に何か恐ろしいことが起こりそうだということを感じて、ウィニーのまわりに集まり、ウィニーにしがみついて、一斉に泣きわめき始めた。リジーは最初に受けた驚きとろうたえでしばらくのあいだ何をしてよいか分からずにいたが、

そこから気を取り直して、老父の所へと小走りにやってきて、彼の両手を自分の両手でつかむと、ウィニーを子どもたちと自分から取り上げないで欲しい、どうかウィニーをこのままここにいさせてくれ、と彼に乞い、懇願し、切に願った。けれどもその老人の決意は固かった。次にリジーは涙を流してとりすがった。けれども老人はより決心を固くして、冷淡になるばかりであった。そして驚きで呆然としているウィニーを、保安官とシンプソン氏は連れて行ってしまったのである。

昼になり、ロバート氏が帰ってみると、リジーは悲しみのあまり寝込んでしまっていて、隣人の一人が彼女に付き添ってくれていた。彼女は、息も絶え絶えに、それでもなんとか朝のやりとりのことを説明した。するとロバートは、希望に満ちた言葉でリジーを慰めたあとで、リジーの父親のところへ行き、リジーがどれほど元気をなくして寝込んでしまったかを説明し、どうかウィニーを返してくれるように懇願した。

ところが、ウィニーは、彼らが信頼し、愛したウィニーは、もうそこにはいないというのだった！あの愛しく才たけたウィニー、ロバート夫妻が我が子のように可愛がったウィニーは、奴隷商人に売られてしまったというのだ。ロバート氏はこれを聞いてひどく落胆し、悲しみに暮れた。

ロバートがこの事実を聞いたときにどれほど嘆き悲しんだかはとてもここに書き表せないほどである。彼はリジーのいる家へと帰って行ったが、この冷酷な事実をとっても知らせる気になれなかった。しかしリジーは、夫の顔がひどく暗く落ち込んでいるのを見て、ひどく熱心に、一体何があったのか尋ねた。ロバートはどうとう本当のことを話してしまった。この知らせにリジーはまた新たに悲しみの涙をほとばしらせた。ひとしきり泣いて、心配でたまらぬという様子を見せたあとで、リジーは目に涙をいっぱい溜めた顔をロバートに向けて、こう言った—

「何もせずにそんなところに座っていちゃだめよ、ロバート！さあ立って！私たちの子供を救うために何かできることをするべきよ、しなくちゃだめよ！あの子を連れて行った役人のところに行って！一体どこの檻の中に、あの子が—あのかわいそうな、愛しい子が—いるのか見つけ出してきてちょうだ

い！今すぐ、何かするべきよ、しなくちゃだめよ！ああ！ロバート、さあ！行ってちょうだい！」

ロバートもそれと同じことを考えていた。彼はすぐに、令状を持ってきた保安官の A 氏のところへ行って、ウィニーは赤ん坊の頃に自分の妻に与えられたものであること、それ以来ずっと家族みんなでウィニーを愛し、大事にしてきたこと、そして彼女と別れ別れになった家族がどれほど悲しんでいるかということ、そしてさいごに、ウィニーは農場での厳しい労働には向いていないし、がさつな黒んぼたちと一緒にはいられないということを伝えた。

じつのところ、保安官は大変親切な男であった。ロバートの訴えを聞いて、彼の同情心は深く突き動かされた。保安官はしばらくの間考え込んでいたが、とうとう、彼の顔がパッと明るくなった。そして彼はうれしそうにロバートを見ると、こう言った。

「あの子はずいぶん大きな女の子だったし、それにあなたの奥さんはあの子をずっと小さいころから養っていたんだね——つまりその、何年くらい養っていたんだね？」

「13 年間でございます、お役人様！」

「そしてシンプソン氏は彼女を与えるにあたってどんな代金も受け取らなかったのだね」

「もちろんです、お役人様！」

「どんな代価も要求しなかったのだね？」

「確かにその通りです、お役人様。すでに申し上げた通り、リジーの父は、ウィニーを彼の娘に無料のプレゼントとして与えたんですから。」

「そしていままでずっと、父親はウィニーを欲しがったことなどなかったのだね」

「一度も、昨日に至るまで一度もありませんでした。」

「それでしたら、シンプソン氏は彼女を要求する権利は持っていませんな！あなたは、あなたの財産を取り戻すために、動産占有回復令状を出すことができますぞ。すぐさまその書類の作成に取りかかりなさい、その書類が私に提出され次第、私がそれを執行しましょう。」

「ああ、ありがとうございます、ありがとうございます、保安官様！」ロバートは真剣に叫んだ。「私と私の妻は、私らの子供について、貴方がとりはからってくれたことに、一生感謝いたします！」

それからロバートはこの新しい希望によってリジーを元気づけようと、さっそく家に帰り、それからすぐに裁判所へ提出する書類にとりかかった。

ロバートは苦もなく動産占有回復令状を作成した。その書類はその晩に保安官の手に渡され、それから保安官はすぐにウィニーが閉じ込められている檻に向かった。

さて、読者の方々は、これでウィニーを取り戻す準備はすっかり整ったとお思いだろうか。ところが、そうではなかった。囚人を通常の刑務所から釈放するには様々な手段があるが、このようなかわいそうな犠牲者をとらわれの檻から出すのは、ほとんど不可能に近かった。そうすることができる法律がなかったのである。それというのも、法律の解釈では、個人の家はその人の王国であり、たとえ正しいことをしようとしている法の執行人といえども、その家を勝手にこじ開けることは誰にもできないというのである。

奴隷商人の家とその檻は同じ壁の中にあった、そしてもし彼が保安官に従わずにその檻の扉を閉ざしたままにしたら、誰も奴隷商人にそれをあけるように強制することはできないのである。奴隷商人は交渉するには手強い相手であった。しかし、他の役人と一緒に行くよりも、一人の方が立ち入りやすいと考えた保安官は、**たった一人**でこの任務を行ったのである。彼は奴隷商人の家に行き、ドアをたたいた。いつも用心深くしている奴隷商人が、家の中から外を見ると、ウィニーを実際に差し押さえた保安官だったので、彼の訪問の目的について怪しむようなことはほとんどしなかった。彼はドアを開けると保安官を招き入れた。保安官を居間へ案内すると、席へ座らせた。**開け放たれた窓辺**のところにはテーブルが据えられていた。保安官はこのテーブルの端のところに座り、窓枠のところに肘をかけて、時折外を見て、通行人が通るのを見ていた。奴隷商人はテーブルのもう一方の端に座った。まもなく、保安官は奴隷商人の目をじっと見据えて、重々しく言った――

「H 殿、私はあなたの占有する動産を回収する令状を持ってきたのです」

「令状ですって！」と狼狽と抵抗の入り交じったような表情で、奴隷商人は叫んだ。

「そうです！令状です。——あなたがここに所有している少女の回収令状ですよ！」

「少女、少女ですって！一体どの少女です！」

「ウィニーという、エリシャ・シンプソン氏にここに連れてこられた、混血の少女ですよ。」

「ここにはそんな少女はおりませんよ、保安官様！そんな少女はおりません」保安官は奴隷商人の目を、さぐるような、脅すような目で再び見すえて、それから、厳しくこう言った——

「しかし、その子がここにいることを私は知っているのです。そして、わたしはあの子を連れてゆく^と決めたのです！」

「連れて行く、ですって？本気ですか？」と、勝ち誇ったようにその奴隷商人は言った。「本気で連れてゆく^といっているのですね？どんな策を使って彼女を取り戻すのか、知りたいものですな！彼女は私の家の壁という^{とりで}砦でしっかり守られていますし、彼女を売り払うまで、あそこに置いておくつもりです。彼女を取り戻す！はん！あなたが取り戻すところを見てみたいものですな！」

「それでは、私がどんな風に彼女を取り戻すか、お教えしましょう！あなたは、焦ったあまり、彼女があなたの檻の中にいる^ということを認めてしまった。大変結構なことです！——それでは、私はこの大きく開いた窓辺に座って、誰かが通りかかるのを待つとしましょう。その通りかかった人に私は呼びかけて、**民警団**³を呼びに行かせることにします。そうしたら、ここら^と一带の近所中の人々が立ち上がりますぞ！あなたにはそれをどうすることもできません。私もそれを止めることはできません。問答無用で、彼らはきっと、完全にあなたの檻の壁を壊してしまうでしょう。まあ、この最後の言葉は、**予言**であって、**脅し**ではありませんがね。」

奴隷商人は真っ青になった。彼はほんのちょっとあおり立てれば、自分に敵意のある人々がまさにそうしかねないことがわかっていたのだ。奴隷商人は弱々しいうすら笑いを浮かべて、こう言った——

「おお、Aさん、ただ冗談を言っただけでですよ！この娘は連れて行って下さい！そうしていただいて一向にかまいません。ただ、どうやったら私はあの老シンプソンに払った300ドルを取り返すことができるんですかね。」

「それはあなたの考えることですな。私のすべきことはただこの娘をその友人たちのもとに戻してあげることだけですのでね。さて、それでは、もしよろしければ、私をその娘のところまですぐに連れて行ってくださいませかな。」

奴隷商人は立ち上がると、家の外へ通じる道を案内して、囲いをくぐると、檻のところまで案内した。そうして彼らは女たちが閉じ込められている置き部屋に入って行った。彼らはかわいそうなウィニーが遠くはなれた一角に、膝の上に腕をのせて、ほおづえをついて座っているのを見つけた。彼女の髪がすっかり彼女の顔を覆っていた——まるですっかり自分を失って、絶望しきっているようだった。保安官は彼女のところへ近づいたが、ウィニーは、それが最初に自分を差し押さえる令状を持ってきた役人だと気づいて、怖がって彼から逃れようと後ずさりした。

「かわいそうに、お前をいたい目に遭わせたりはしないよ。こうして来たのはお前さんをお前さんの味方のところに戻してやろうと思つてのことなんだ。——さあ、立って、私についておいで。」

「そうだ、立ってついて行くんだ」と奴隷商人も叫んだ。

しかしウィニーはまだ尻込みして、震えているばかりだった。彼女はその保安官が、一度はひどく彼女を痛めつけたということを忘れてはいなかった。そして彼女は、彼がまたそうするだろうと恐れたのだ。その慈悲深い保安官が彼女を説得して静かにさせ、彼を信用してついてこさせるまでにはしばらく時間がかかった。それから保安官は彼女を連れて行った。これが行われたのが土曜日の夕方であった。そのときロバート・オリソンは日曜の夕食を買いに市場に出かけていた。リジーがたった一人で部屋に座っていると、保安官がウィニーとつれだって家に近づいてきた。このままウィニーをリジーに引き渡してもよいのだが、急な再会の喜びは、リジーのようにいまや弱って神経質になっているものには身体に悪い刺激を与えてしまうのではないかと保安官は考えて、慎重を期してウィニーを少々家から離れたところに残して、リジーに徐々にウィ

ニーが帰ってくることを知らせることにした。保安官は、最初に家に入ってゆく前に、ウィニーに角のところに立っているように言った。しかしウィニーは、もうすっかり保安官への信頼を回復したので、彼からはなれようとしなかった。彼女はまた別の男に逮捕されはしないかとびくびくしていたのだ。

「安心しなさい、娘さん」と保安官は言った。「もう誰もお前さんに乱暴なまねをしたりはしないからね」

そうやって彼女をなだめると、彼は一人で家に向かった。リジーは保安官がやってくるのを見ると、真っ青な顔をして、震えながら、彼に会うために家から走り出てきた。リジーの顔は悲しみのあまりむくんで、そして彼女の目はひっきりなしに泣いていたのですっかり赤く腫れ上がっていた。そして彼女は叫んだ――

「ああ、保安官さま、保安官さま。私の子供はどうなったんです？ 私の娘はどこにいるんです？」そしてリジーは興奮のあまり気を失いそうになった。

「あなたの娘さんは無事です。彼女はあなたのところに無事戻ることになりました。」

「それはいつです、今どこにいるんですか？」

「ウィニーは今やってきますよ。もう近くまで来ているんです」

それを聞くと、リジーはものも言わずに、門の外へと走り出たので、それに続いてリジーの子どもたちもみんな門の外に走り出た。リジーはウィニーを見つけた――リジーは走りより、ウィニーをその手に抱きかかえると、喜びのあまり泣き笑いだした。そして子どもたちもウィニーを抱きしめ、キスして、ウィニーの周りで踊り回った。彼らは自分たちの父親が市場から帰ってくるのを見て、走り出して行って彼にこう叫んだ――

「ねえ！お父さん、ウィニーが家に帰ってきたんだ、帰ってきたんだよ！」

ロバート・オリソンは市場の買い物カゴを取り落とす。すると、羊肉のもも肉が飛び出し、エンドウ豆がバラバラと転がり落ち、それを追ってトマトも下に落ち、そしてとうとう、ロバート・オリソンは両腕をあげると、ウィニーをその目で見えて妻や自分の子供と一緒に祝いをしようと大急ぎで道を走ってきた。そしてとうとう、皆は喜びで胸の内をすっかり興奮させて、ほとんど半

狂乱になって家の中へと入って行った。彼らは夕食を食べた——それはウィニーがいなくなって以来ずっと食べていなかった、まともな夕食であった。その夕食の後、彼らは市場の買い物カゴの惨状を見に行き、そのひどいありさまを見るとみんな心から笑った。そして、もうロバートは疲れてしまっているので、リジーとウィニーで市場に行こうということになり、皆それに従った。

その翌朝、リジーはみんなで教会に行き、全能なる神様に「自分たちの災難がすっかり幸せな結果に終わった」ことを感謝しなくてはならないと思う、と言った。

後妻のシンプソン夫人も、ついにはリジーの家族には丁寧に接した方がお互いに最も利益があることがわかって、老シンプソン氏の家族とリジーの家族はどうとう仲直りした。そして人間に許される限りの、誰に遠慮することも無い幸福を、リジーの家族は楽しんだ。

<おわり>

●作者について

E.D.E.N. サウスワース (Emma Dorothy Eliza Nevitte Southworth, 1819-99) は、19世紀アメリカにおいて最も人気のあった作家の1人である。彼女は幼い頃に実父と死別し、養父がワシントンで経営する学校で学び、抜群の成績を収め、16歳で卒業した後は結婚するまで公立学校の教員として働いていた。1840年には、フレデリック・ハミルトン・サウスワースと結婚するが、4年後、二人目の子供を妊娠中に、自称発明家で移り気の人と離婚し、その後、家計を支える為に教員の仕事を再開し、また、収入を補うために地方新聞で文筆活動を始めた。彼女の最初の作品 *Retribution; or, The Vale of Shadow* が1849年に出版されると、たちまち20万部を売り上げ、彼女は一躍時代を代表する流行作家となった。サウスワースは生涯で60以上もの長編小説を出版し、その代表作は1859年に連載された『隠れた手』(*The Hidden Hand*) や『イシュメイル』(*Ishmael*, 1876) などである。サウスワースは、その多くの作品で、女主人公が運命の荒波に巻き込まれ、さまざまな困難をその独立心と快活な気性で切り抜ける様を描き出した。彼女の作品の多くは、家庭の価値を再確認し、結婚によって主人公が永遠の幸福を勝ち取るという典型的な19世紀のセンチメンタルな家庭小説の価値観を代表するものであったので、20世紀に入ると、彼女の作品はほとんど顧みられなくなった。日本でも、サウスワースの作品はほとんど翻訳されていない。だが、現在の目から見ると、サウスワースの、女性を主人公に据えて、巧みな筋で読者を引きつける作品の魅力は失われてはいないと思われる。今回訳した短編「ウィニー — ある子供の物語 —」も、現代の読者の目からみると、かえって様々な問題点、そして、興味深い点を見いだすことができるだろう。短編ではあるが、

サウスワースのほとんど知られていない作品を翻訳、紹介することで、サウスワースの魅力の一端を知っていただければと思う。

●テキストについて

「ウィニー；ある子供の物語」(“Winny; A Child’s Story”)は、E.D.E.N. サウスワースの短編集『妻の勝利；その他の短編』(*Wife’s Victory; And Other Nouvelettes*, 1854)に収録された短編である。この短編集の初版にはミスプリントがあり、一部のページが前後しているが、その部分を訂正した上で翻訳した。底本は以下のとおり。

E.D.E.N. Southworth. “Winny; A Child’s Story.” *Wife’s Victory; And Other Nouvelettes*. Philadelphia: Peterson, 1854. 325-342. <<http://archive.org/details/wifsvictoryothe00sout>>

訳注

-
- ¹ このエピソードは、英国の劇作家、詩人、随筆家として知られるメアリー・ラッセル・ミットフォード (Mary Russell Mitford, 1787-1855) の詩「リエンツィ」(“Rienzi”)の一節。ミットフォードは、現在では主にイギリスの田舎暮らしを愉し気に描き出した作品で知られている。
 - ² 原文では“delf ware”となっているが、“delftware”のミスプリントであろう。delftware (デルフト陶器) は、17世紀初頭にオランダのデルフトで作られたスズ釉陶器。白地に青の模様が特徴的で、このスズ釉の技術はイギリスにも伝えられ、イギリスで作られたものもデルフトと呼ぶ。
 - ³ 民警団 (“posse comitatus”) は郡内の治安を守るために、その地域の住民により組織された自警団を指す。南北戦争以前のアメリカの多くの州では、保安官あるいはそのほかの治安を守るべき役人が、その地域で必要に応じて自警団を組織、招集できる権限を持っていた。いくつかの州では保安官や役人からの自警団の招集の要請に協力しない住民は罪に問われることもあった。